

※はじめに

○『無量寿経』と「菩薩四種功德」の関係

- ・天親菩薩の『浄土論』の正式名は『無量寿経優婆提舍願生偈』である。天親菩薩がその身にただかれた『無量寿経』の教法をたたえてうたわれたのが『浄土論』である。
- ・それでは「菩薩四種功德」は『無量寿経』の何にもとづいているのだろうか。第二十二願「還相回向の願」では「遊諸仏国 供養諸仏 開化衆生」の普賢菩薩行を行ずる還相の菩薩の誕生が願われているが、『浄土論』の「菩薩四種功德」はその還相の菩薩の功德が、上巻では偈としてうたわれ、下巻では論じられているのである。
- ・第二十二願はさらに第二十三願「供養諸仏の願」・第二十四願「供具如意の願」と展開していく。天親菩薩は第二十三願をただかれて菩薩四種功德の第一「不動徧至の徳」（※功德の名は学者によっていろいろである。今は慧然師による）と第二「一念普照の徳」をうたわれるのである。さらに第二十四願をただかれて第三「諸刹讚仏の徳」をうたわれるのである。
- ・第二十三・二十四願の願文は次のとおりである。

（第二十三願「供養諸仏の願」）

設い我仏を得んに、國中の菩薩、仏の神力を承けて、諸仏を供養せん、一食の頃に 徧く無数無量那由他の諸仏の国に至ること能わずば、正覚を取らじ

【口語訳】

たとえ私が仏に成ったとしても、私の国の中の菩薩たちが、仏の威神力をうけて、諸仏を供養しようとして、一念一時に（一食の頃に）徧く数限り無い諸仏の国に至ることができないようであれば、誓って正覚を取りません。

（第二十四願「供具如意的願」）

設い我仏を得んに、國中の菩薩、諸仏の前に在りて、其の徳本を現ぜん、諸の欲求する所の供養の具、若し意の如くならずば、正覚を取らじ

【口語訳】

たとえ私が仏に成ったとしても、私の国の中の菩薩たちが、諸仏のみに在って、（徳の本である）供養の心がおこったときに、諸々の求める供養の具が、もし意のままにならないようであれば、誓って正覚を取りません。

○下巻における「不虛作住持功德」から「菩薩四種功德」への展開

- ・下巻においては、明らかに「不虛作住持功德」をうけて「菩薩四種功德」が展開している。あるいは、「不虛作住持功德」の釈文において「菩薩四種功德」が略説されていると言うこともできようか。
- ・下巻において曇鸞大師が註釈される『浄土論』「不虛作住持功德」の文の内容は次のとおりである。

浄土の阿弥陀仏を見れば（に会えば）未証浄心の菩薩（初地〜七地）が平等

法身を得て、淨心の菩薩（八地）・上地の菩薩（九・十地）と同じく寂滅平等を得る。

これは『華嚴經』の「菩薩十地」にもとづいている。「菩薩十地」は『大經』の背景になっているのである。

この『浄土論』の文は八・九・十地のいわゆる「還相の菩薩」について語っている。

・この『浄土論』の文に関する曇鸞大師の註釈の要点は、淨心の菩薩・上地の菩薩に焦点を当てれば次のようになるであろうか。

淨心の菩薩・上地の菩薩は、

・八地以上の法性生身の菩薩である。

・報生三昧を得ている。

・菩薩四種功德を行じている。（曇鸞大師はこれを略説している。）

・仏事を作せども、往來の想・供養の想・度脱の想なし

・七地沈空の難を超えている。（胎生往生を超える）

下巻の「菩薩四種功德」の文においては、これらの内容が再説、あるいは別表現をもって詳説されてくる。

## 一、菩薩功德の本質―不行而行（如実修行）

・はじめに『浄土論』の文があげられる。試みの口語訳で示すと次のようになるであろうか。

どのように菩薩の莊嚴功德成就を観察するのか。菩薩の莊嚴功德を観察すると、彼の菩薩を観察して、四種の正修行（自利利他円満の行）による功德が成就しているということを知るべきである。

・次にこの文についての註釈が述べられる。曇鸞大師は、ここでは「正修行」の本質（体）について押さえられる。

「真如は是れ諸法の正体なり。体、如にして行ずれば、則ち是れ不行なり。不行にして行ずるを如実修行と名づく。」これは分別知を超えた難しい言葉であるが、そのこころを推測するに、真如は「あるがままにある」ということと解すると、「真如を体として行ずる」とは自然ということである。自然であるから作意はない。故に不行というのである。不行、すなわち無我にはからい心のない行として行ずるのを如実修行という。

一言でいえば、菩薩の行は、法（本願）の自然なるはたらきであって、無我にしてはからいのない自然の行だというのである。

・曇鸞大師の菩薩功德の註釈においてはこの押さえが一貫している。確認してみよう。

・この菩薩は報生三昧を得るのであるが、報生三昧を得るとは、心に分別したり、心を配ったりすることなしに任運無用に衆生を救済できるのである。

・またこの菩薩は、往來の想なし、往つたり来つたりの分別がない。供養の想・度脱の想なし、作して作したという想がないのである。不行而行である。

・また上巻の第一の功德の中で曇鸞大師は、「如実修行とは（真実の法の力のま

まに行ずることであるから)常に修行しているけれども、しかも実際(作意的)に修行するところがないのである。」と註釈している。

●また未証浄心の菩薩(初地〜七地)は作心(はからい心)を離れられないのであるが、浄心・上地の菩薩(八・九・十地)はこれに対するものである。

●また菩薩の行は、法(本願)の自然なるはたらきであって、無我にしてはからいのない自然の行であるから、不動偏至・一念普照なのである。

○問―菩薩四種功德には他の莊嚴功德のように名前が付けられていない。それはなぜか

答―体が一つだからであろう。曇鸞大師は「体は唯一如であるが、義によって四つに分けている。だから四つの行は一つに統一される。」と言っている。四つの名前があれば、体が一つでないような混乱が生ずるかもしれない。だから名前を付けていないのではないか。

## 二、第一「不動偏至の徳」

### ▼偈文とその大意

安樂国は清浄にして 常に無垢の輪を轉じ  
化仏・菩薩の日 須弥の住持するが如し

(大意)安樂国(浄土)は清浄であって、常に無垢(清浄)なる如来の本願が、輪が回転するようにはたらいっている。応化(衆生済度のために相手に応じて現れる)身である仏・菩薩は、日(太陽)のように、その光は諸々の世界に遍く至るのであるが、この譬えでは不動偏至ということがはつきりしない。不動であることを明らかにするために、須弥山が世界を住持するが如しというのである。

### ▼『浄土論』の文

浄土の菩薩は仏の国土に在って、身を動かさずに遍く十方の世界に至って、いろいろに応化して如実修行をし常に仏事を作す。(偈)諸々の衆生の於泥華を開くからである。

### ▼曇鸞大師の註釈(要点)

・八地以上の菩薩は、常に報生三昧に在って、三昧力によつて身は本処から動かないで遍く十方に至つて諸仏を供養し、衆生を教化する。

・次に偈の「無垢輪」「常転」「日」「如須弥住持」の意味について説明する。趣旨は右の大意と同じである。

・最後に「諸の衆生の於泥華を開く」について註釈する。凡夫が煩惱の泥の中に在りながら、菩薩によつて開導されて仏の正覚の花を咲かせるように、菩薩は三宝をさかえさせて絶やすことがないのである。

### ▼「不動偏至の徳」

・菩薩四種功德の第一は「不動偏至の徳」である。孫悟空ならば毛を抜いてフツと吹いたら小悟空になってあちこちに行くけれども、不動であつてあらゆる世界に至るといふことは、この身をもつ人間の行為としてはあり得ない。

不動偏至とは、人間が主体となつて不動にしてあちこちに行つて衆生を教化する

というのではない。不動にして徧く至るというのは、例えば、釈尊はインドで法を説かれたのであるが、インドから遠く離れた中国や日本でも、その仏法によって同じ目覚めがおこっているなら、釈尊は不動であつて衆生を教化されたといえるであろう。

不動徧至とは、法（本願）のはたらきは我々が生活の中で感ずる空間を超えているということである。普遍の法だということである。

浄土の菩薩は本願力をいただいて、動かないでも無数の諸仏の国に至つて諸仏を供養し衆生を教化するというのは、本願のはたらきをいただいて生きていくということが、こういう質をもっているということではないか。

### 三、第二「一念普照の徳」

#### ▼偈文とその大意

無垢莊嚴の光 一念及び一時に

普く諸仏の会を照らし 諸の群生を利益す

（大意）清浄（無垢）であり、形なき一如宝海より形をとつてあらわれる（南無阿彌陀仏の智慧の）光は、前とか後とかいうことなく、一念一時に普く諸仏の会を照らして、諸々の衆生を教化して利益する。

#### ▼『浄土論』の文

彼の浄土の菩薩の応化身は、どんな時でも前後の区別なく、一心一念のうちに大光明を放つて、悉くよく徧く十方世界に至つて衆生を教化する。いろいろに方便を尽くして修行して、そのことによつて一切衆生の苦を滅除するからである。（偈）

#### ▼曇鸞大師の註釈

第一の功德では不動にして徧く至ると言ったが、それだけでは至るに順番があつて前とか後とかがあるかもしれない。だから第二の功德として、一念一時に徧く至つて前後ということはないと言ふのである。

#### ▼「一念普照の徳」

・菩薩四種功德の第二は「一念普照の徳」である。我々の生活の中で感ずる時間を超えているというのである。

・曇鸞大師は上巻で次のように言っている。

一時でないなら往来（往つたり来たり）がある。往来があるならば不動ではない。だからこの功德も亦、不動の義を成就するものである。

・親鸞聖人は八百年も前に生きて、本願をいただいて、智慧を語つて亡くなつていかれた。聖人はもうおられないけれども、その智慧は空間・時間を超えて聞く人のところにいつでもはたらいっている。不動徧至・一念普照とはこういうことを象徴しているであろう。

南無阿彌陀仏の讃嘆を聞いて、南無と頭が下がった人から、南無阿彌陀仏の讃嘆が出てくる。それが覚えすしらず他の人に空間・時間を超えて無限に響いていく可能性があるのである。

### 四、第三「諸刹讃仏の徳」

#### ▼偈文とその大意

天の樂と花と衣と 妙香等を雨（ふ）りて供養し

諸仏の功德を讃ずるに 分別の心有ること無し

（大意）天から音楽や花や衣服や妙なる香などの供養の具が雨が降るように自然にただけて、それをもって供養し、諸仏の功德を讃嘆する。しかしそこには分別の心は無い。

#### ▼『浄土論』の文

彼の応化身は一切世界において余すところ無く、諸仏の会座に集まった大衆を照らすに余すもの無く、廣大無量に諸仏如来の功德を供養し、恭敬し、讃嘆するのである。（偈）

#### ▼曇鸞大師の註釈

- ・「余すところ無く」とは、明らかに遍く一切世界の一切諸仏の大会に至って、一世界・一仏土として至らないところは無いのである。
- ・「肇公の言わく：」以下の文は僧肇師の『註維摩經』の序によっている。難しい言葉である。意味するところは、法に順じて、無我にしてはからい心無き菩薩の不動徧至・一念普照・諸刹讚仏の徳を表現するものである。

#### ▼「諸刹讚仏の徳」

- ・天から音楽や花や妙なる香などの供養の具が雨のように降ってくるというのは、自然にただくということ象徴しているであろう。
- ・最大の供養は頭が下がって教えをいただいでいくことである。聴聞の心を捧げるのである。故に供養・恭敬と熟するのである。
- ・ここでは供養・恭敬から讃嘆へと展開している。これは二通りの意味があるのではないか。
- 一つは、菩薩の行は供養諸仏・開化衆生であるが、その普賢菩薩行は具体的には法の讃嘆であるということである。そして上巻では、平等の法に目覚めているから、菩薩は優劣というような分別なしに讃嘆すると言っている。
- 二つ目は、法然上人は五種正行の五番目の讃嘆供養について、「若し讃嘆と供養を開いて而も二と為せば六種の正行と名づくべきなり」と、讃嘆と供養を分けるということを言われている。そのことで何を言おうとしているかと言うと、讃嘆は供養になるが、供養必ずしも讃嘆ではないのである。従って法の讃嘆をほかにして供養諸仏・開化衆生はないのである。

### 五、第四「持蔽三宝の徳」

#### ▼偈文とその大意

何等の世界にか 仏法の功德の宝無さぬ

我れ願わくは皆往生して 仏法を示すこと仏の如くせん

（大意）どこに仏法功德の宝（仏法僧の三宝）が無い世界があるうか。私はその世界に生まれていって、仏法を示すこと仏のごとくであらんと願う。

（※この大意は異論あるところであろう。これについては『浄土論』の文と曇鸞大師の註釈を見た後で論じたい。）

#### ▼『浄土論』の文

彼の応化身は、十方一切世界の三宝の無い処において、仏・法・僧宝の功德の大海を住持し莊嚴して、遍く世界に示して如実修行を衆生に解らしめるのである。(偈)

#### ▼曇鸞大師の註釈

先の第一・二・三の功德においては、「遍く至る」と言ってもみな仏まします国土のことである。若しこの第四の功德がなかったら、法身も法のはたらきを為さない所が有ることになる。最上の善も善ではない所が有ることになる。

(いや、法身のはたらかないところは無いのである。)

#### ▼「持厳三宝の徳」

これは、「仏・法・僧の三宝の無い世界に生まれて行って、仏法を示すこと仏のごとくであらんと願う」のである。「仏・法・僧の三宝の無い世界」への願いとすることは『浄土論』の文を見ても間違いないことである。

問題はその「仏・法・僧の三宝の無い世界」へ向き合う姿勢にある。それは「何等の世界にか 仏法の功德の宝無さぬ」をどう読むかにかかっている。

一つは、A「どこかに仏法功德の宝が無い世界があるならば」と仮定法だと読むのである。そしてほとんどの解釈はこのように読んでいる。

もう一つは、B「どこに仏法功德の宝が無い世界があるうか」と反語として読むのである。

・ Aの読み方は、ともすれば二元分別的な発想になる。本多弘之師は「ある価値がここにはあつて、あちらにはないと発想のすることの罪」ということを言っておられる。例えば近世・近代の欧米諸国による世界各地の植民地化の背景にはキリスト教が一番という考えがあつて、キリスト教でないところは踏みつけて当然という発想があつたではないか。これは宗教・宗派ということでは、仏教か仏教でないか、念仏か念仏でないか、正しい教義か間違つた教義か、優れた教えか劣つた仮の教えか、という二元分別的な発想をして、しかも自分の立場に固執して他と対立するという問題である。

・ 私はBのように読みたいのである。なるほど表面的には三宝無きが如くであつても、菩薩はこの世界の衆生も願いに響く可能性を持っているのだという尊敬と信頼の上に立っているのである。これは曇鸞大師の註釈が法の普遍性に中心をおいていることから言えるのではないか。尊敬し信頼するということは、頭が下がっているのである。これは法蔵菩薩の精神である。

・ 第四「持厳三宝の徳」は、広大で、頭の下がつた謙虚な無我の心に住して、衆生を尊敬し信頼していく法蔵菩薩の精神だと思う。

#### ○凡愚が菩薩四種功德のはたらく場所になる

・ 「はじめに」のところで「菩薩四種功德」は「不虚作住持功德」をうけて展開すると言つた。それは、天親菩薩・曇鸞大師では、未証淨心の菩薩が平等法身を得て、淨心・上地の菩薩になるのであつた。

・ 然るに聖人は『入出二門偈頌』(15/1)で次のようにうたつておられる。

彼の如来の本願力を観ずるに 凡愚遇うて空しく過ぐる者無し

聖人は「凡愚」が功德をいたさくのだと了解しておられるのである。これは、凡愚が菩薩になるのではない。本願に遇えば、凡愚のままに、あるいは凡愚の自覚のところ、その凡愚の身が菩薩四種功德のはたらく場所になるのである。凡愚を場所として本願がはたらくのである。

・ 譬えて言えば、親磁石の強力な磁力にあつて引きつけられたら、錆びたボロ釘も錆びたボロ釘のままに磁石となつて、ボロ釘の思いをこえて磁力を伝えるようなものである。

・ 南無阿弥陀仏の讃嘆を聞いて、南無と頭が下がったら、自然に讃嘆となる。それが覚えしらず他の人に響いていく可能性があるということであろう。